

教育と文化



2020年までに13割?

進めよう 男性の育児休業取得を

● 問合先 男女協働推進課

男女協働推進係 ☎ 2115

平成28年度の女性の育児休業取得率は81・8割と、毎年増加しています（厚生労働省『平成28年度雇用均等基本調査』）。しかし、30人未満の事業所では68・9割と大企業を含めた全体平均よりも10ポイント以上低く、中小企業では、取得しづらい状況が見受けられます。

一方、男性の育児休業取得率は3・16割。年々少しずつ上昇し、過去最高となっているものの、国が目標とする『2020年までに13割』にはほど遠いというのが現状です。

また、育児休業の取得日数も5割以上の男性が5日未満に留まっています。父親になった男性の内、約3割が1カ月以上の育児休業を取りたい意向を持っている（内閣府『平成27年度調査少子化社会に関する国際意識調査報告書』）ことを考えると、育児休業の取得率や取得日数は、希望と実状との間に大きな開きがあります。

国では、目標を達成するために、働く男性が育児をより積極的にすることや育児休業を取得することができるよう、社会の気運を高めるための『イクメンプロジェクト』を推進。先進的な取り組みを普及し、企業や上司の意識改革を行っています。

しかしながら、男性が育児休業を取得しなかった理由については、『職場が取得しづらい雰囲気だから（26・6割）』が最も多く、次に『会社の制度が整備されていない（26・0割）』と、職場環境に関する理由が多く挙げられています（『平成29年度版少子社会対策白書』）。

『家事や育児は、男女がともに協力して行うもの』という意識を誰もが持つことが必要です。また、企業も働く人たちの仕事と育児の両立を促進し、育児休業を取得しやすい職場環境づくりに努める必要があります。まずは、一人一人の意識改革を。

郷土の文化財

伊万里湾の歴史シリーズ⑤

● 問合先 生涯学習課文化財係 ☎ 3186

伊万里津（1） 佐賀藩内で最も重要な『津』

中世に、松浦党の支配下にあった伊万里は『伊万里浦』と呼ばれ、『伊万里津』と呼ばれるようになったのは近世の初め（安土桃山時代）になってからでした。1592年（文禄元年）、豊臣秀吉の朝鮮出兵時に、鍋島直茂の軍勢は伊万里を拠点としていましたが、この頃には既に『伊万里津』と呼ばれていました。

伊万里津は遠浅で干潮時には船が入れなくなるため、必ずしも港として優れていたわけではありません。それでも佐賀藩の他の津（港）に比べ、飛びぬけて重要な交易拠点であることが公文書に残されていた運上銀高から明らかになっています。

佐賀藩にとって伊万里津が重要な場所であることは、役人の配置のしかたにも表

れており、『伊万里・有田・横辺田代官』という、地区を総括する代官とは別に『伊万里心遣役』という職が設置されていました。この心遣役には代官宛とは別に命令書がたびたび出され、主に伊万里津の管理や治安維持に関する内容となっていました。

近世に入って中世までとは異なる地域の支配・管理体制になると、それまで以上に伊万里の港湾としての重要性は増し、管理体制もほかに比べて特筆すべきものとなっていました。



↑現在の船屋町